

私の入ソ

神奈川県 菊川 栄 一

終戦も間近い昭和二十年三月七日、親、兄弟、親戚一同に立派に戦って来いと励まされ、日の丸の旗の寄せ書きをがっちり肩に掛け、住みなれた郷土を後にしました。

大阪の道頓堀に各地より集結、約一週間旅館で待機。その間軍服、靴その他の支給があり、日本国のために一路北滿。ソ連国境に近い孫呉電信第四十二連隊無線隊第五中隊に現役兵として入隊いたしました。

再び故国の土を踏めるかどうか定かではないが、とにかく毎日の訓練に励みました。八月十五日、突然部隊長の訓示ありとの臨時非常呼集がかかりました。部隊長は声もおろろに「大本営発表、陸海軍全部隊に対して即時戦闘行動を停止すべし」との命令が発せられた、すなわち無条件降伏したのであると伝達され、お

前たち兵は日本国再建に努力せよと訓示された。整列の兵たちは無念の涙を流しました。

やがてハルビンにてソ連軍より武装解除、直ちに日本国に帰すとのことで、約三十キロ続くとされる五列縦隊の行軍が開始された。疲れ果て途中で倒れる戦友も数知れぬありさまでした。暑いのでのが湯き、川に差しかかるとがぶがぶ飲んだのです。ちよつと変な味がするなと思つたら、川上で魚が死んでいたりしたのです。

何日間歩いたものやら、苦しい行軍もやつとの思いで到着した所は、何と満州よりさらに環境の違ったシベリアの大地、有刺鉄線が張られたウオロシロフ十四地区五六五強制収容所で、国营農場だ。行軍した全員のお三分の一くらいの人数でした。他の戦友たちは別の収容所に行きました。旅の疲れをいやすために三日間の休養後、朝早く起床させられ、十人くらいずつ馬車に乗せられ、四キロくらい収容所から遠い見渡す限りの畑です。草刈りでニンジン畑の草むしり。向こう側に着くと夕方。遅れている者にはできた者がみんな

手伝ってやりました。馬鈴薯植え、トマトの収穫等毎日ノルマに追われ、作業に精を出しました。十月ごろから畑仕事はできないので、漬物工場にてトマト、キヤベツ、ニンジン等の塩漬け作業。

冬がやつと過ぎ、我々にはうれしい夏が来たと思つたら、また酷暑の冬。三年目の夏のある日、突然下腹が作業中痛み七転八倒の苦しみ。その後は何も覚えてない。ふと気がついて見たら、ベツトの中。さらに肝をつぶしたことは、口の中に水が入ってきたのだ。ゴクリ音とともに飲み込みました。その瞬間我に返り、目の前に白い服を着ているような人らしき者が立っているのに気がつき、よく見直したら、看護婦です。野戦病院の狭い個室部屋だった。ロシア語も多少話せる事ができていたので、今までの経過など聞くことができました。意識不明が二日間とのこと。三途の川の一步手前で引き返したのです。私を日夜面倒を見てくれたその看護婦さんの名はマローシャさん。私は母親に会っているような思いで、万感胸に満ち何度もお礼を申し上げました。

食事時にいろいろの話しをしながらアワ、コウリヤン等のかゆをスプーンで口の中に入れてくれました。どうやら歩けるようになったとき、散歩に連れていかれてもらったのです。その所はヒマワリの花がたくさん咲いている所です。地獄に仏で、秘めたる初恋の味のような気がしました。

やがて二か月後退院の日が来たのです。また収容所に帰るのかと思いきや、病院内食堂の炊事場です。驚いたことには炊事班長が同じ町内に住む先輩の人だったので、懐かしさの余り一晩中話をいたしました。炊事場なので別にノルマなどなく、食い物は腹いっぱい食ふことができた。お陰でどうやらすっかり元氣を取り戻した感がありました。命拾いをしたので、炊事作業が終了してから各病室に回ってみんなを元氣づけて上げました。

またもや夏も終わりに近づきそうになったとき、病院側から呼び出されたのです。すなわち退院者百人の中に入っていました。世話になった炊事班長並びに各病室の戦友に涙ながらにお別れをしました。

貨車に乗りさらにトラックに乗せられ到着した所は山の中。今までの閑静な農場とは打って変わった収容所で、仕事は伐採作業だ。奥深い山の中にトラックで運ばれ、無線通信機を持った手が二人引き鋸に変わったのだ。友より聞く話だと、最初はノルマが四立米だったのが六立米、今では八立米とのこと。死に直面した絶望の生き地獄さながらだ。ノルマを達成した組は毎日数えるほどしかなかった。

現場へ着くと、伐採に適した立ち木を探す。一抱えもある大木が物凄いい響きを立てて倒れる光景は壮観ではあるが、最も危険です。死傷者がかなり生じたのです。酷寒の中での作業ゆえ、防寒服防寒靴で動作が鈍い上に、栄養失調と三重のハンディで完全に麻痺し、大木に押しつぶされて他界した友は数知れません。

死亡することに屋外のテントの中に安置して、大体五十人くらいになるとトラックに積み、山の中の大きな穴に埋葬するのです。実は私の祖父が僧侶なので、私は幼いときから門前の小僧でお経は詠めましたので、埋葬するたびに涙を流しながら、戦友よ安らかに

眠れよと一心にお題目を唱えました。

過酷な極限状況の抑留生活は一生忘却はありません。また命の恩人看護婦マローシャさんを偲ぶ意味で、復員以来現在に至るまで、夏にヒマワリを栽培しています。

抑留中及び帰国後亡くなりました多数の戦友のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

私の捕虜体験記

新潟県 田中 新治郎

入ソまで

終戦の報を聞いたのは、北鮮の地名も知らない場所であった。

血気にはやったつわものたちは「そんなことを言うとおぼく殺されるぞ」と連絡員をどなっていた。間もなく武装解除の命が出て、銃身に刺んだご紋章を小石で削って一か所に積んだ。やがて部隊は吉州に集結する